

「放射線科」

放射線科技師長 福井 達夫

1 はじめに

私は、兵庫県の日本海側にある豊岡という田舎で生まれました。豊岡という土地は周囲が山に囲まれた盆地となっていて、イギリスのロンドンのように霧が深い所です。早朝の朝もやは、なんともいえない幻想的な雰囲気、不思議の世界へ迷い込んだようです。また、国の特別天然記念物であるコウノトリが日本で唯一豊岡に生息しています。昨年、野性化を目指して 5 羽のコウノトリが放鳥され、かわいい雛も生まれ親子で元気に飛び回っています。今年は 7 羽の放鳥が計画されています。

私は、自然の多いすばらしい環境で育ったのですが、子供の頃は少々病弱で頻繁に病院に通いました。当時、体の具合が悪いのと、消毒薬のような臭いが立ちこめる陰気な雰囲気が重なって、病院がとてもしやでした。

その病院というところに勤めてから、なんと 35 年が経ちました。今ではこの茅ヶ崎市立病院が大好きです。なぜ病院が好きになったのかというと、子供の頃の病院のイメージに比べて、当院は格段に清潔で明るい雰囲気だからというのも理由ですが、本当は体が丈夫になったからだと思います。成人してから今まで不思議なくらい元気です。体は細身ですが、元気で働くことができるということがいかに素晴らしいことか、日々感謝しています。もう一つの理由は、放射線技師の仕事が大好きだからです。人間の体の不思議さ、絶妙さを様々な角度から画像として見ていると、人間の神秘性というすばらしさに感動し



ます。

2 放射線科のスタッフ

放射線科は、大越放射線科部長及び芹沢放射線医長の 2 人の医師のもと、15 名の放射線技師、放射線科補助員と受付数名のスタッフで運営しています。ユニークなスタッフがそろっていて、仲間と力を合わせて働けるのはとても楽しいものです。

業務内容は、通常、一般撮影、CT 検査、MRI 検査、RI 検査等を行っていますが、脳出血、脳梗塞、心筋梗塞、交通事故などの命の危険がある患者さんが突然運ばれてくることがあります。その時は、放射線科スタッフ一丸となって対応しています。

3 ガン健診のすすめ

ところで、現在日本人の 2 人に 1 人がガンにかかり、3 人に 1 人がガンで死亡しています。さらに 10 年後には、2 人に 1 人がガンで死亡すると予測されており、ガンになる人が増えています。人間は必ず死ぬ運命にあるわけですが、できれば若くしては死にたくないものです。

早期に発見すれば、治すことができるガンがたくさんあります。その中の 1 つが乳ガンです。乳ガンは、急速に増加の一途をたどっ

ていて、全国で大腸ガンに次いで第2位の発症率となっています。これは、成人女性の内、30人に1人が乳ガンになる割合です。発症年齢は、20代から始まり45歳がピークです。しかし、早期に発見することができれば、ほとんど治すことができます。そのために、年に1回、健康診断を受診することをお勧めします。有効な検査は、超音波検査とマンモグラフィーで、当院でも受診することができます。

4 ガン治療機能の充実

人口の高齢化に伴って、ガン患者の増加は顕著なものがあります。当院においてもガン治療機能の充実が求められているわけですが、ガン治療の三本柱である手術、化学療法と並ぶ放射線治療を行うために、今年度放射線治療を行うための装置（リニアック）を導入することが決まっており、現在その準備に追われています。

リニアックの導入は、当院にとって大きな事業であり、放射線科にとってはまさに一大プロジェクトです。どのような治療ができる機種を選定するか、治療方針を検討し、それに基づいた詳細な仕様書を作成する等、慣れないことが続いて、今後しばらくは眠れない日々が続くそうです。

文部科学省への申請までには、リニアックに関することをすべて理解し、説明ができるようにならなくては許可が下りないので、覚悟を決めて必ず最短で申請を終らせようと闘志が湧いてきます。

米国では、ガン患者の6割が放射線治療を受けていますが、日本では2割程度です。その理由は、以前日本では胃ガンが多く、胃ガンの治療には手術が一番有効だったためです。そのことから、日本は、世界一の手術大国といわれています。

しかし、現在では胃ガンが減少し、放射線治療が有効なガンが増えています。

5 緩和ケアについて

放射線治療は、主としてガンを完全に死滅させるための治療として行われますが、手術では届かないガンを小さくすることや、ガンによる疼痛を和らげることもできます。

欧米では、治癒できないガンを持つ患者、痛みなどの症状を持つ患者の苦しみを和らげる緩和ケアの考え方が確立しています。痛みの少ない患者は、食事をすることができますし、睡眠も確保できるので長く生きることができるようで、残念ながら治癒できない末期のガン患者にも、緩和ケア等の適切な医療が提供されるべきだと思います。

わが国は放射線治療の後進国と云われていますが、なかでも緩和医療は非常に遅れています。緩和医療とは、痛みからくる苦痛への対処、死と向き合う精神的苦痛への対処、残される者への対処などがあります。そのなかで最も辛いのが痛みからくる苦痛です。この苦痛がなければ、人生の最期をもっと有意義に生きられるはずで、当院でも緩和ケアには力を入れており、月1回緩和ケア研修会を開催し、ここで疼痛に悩む患者さんの症例検討を行っています。

日本では、ガンの痛みを和らげるモルヒネの使用量が、カナダやオーストラリアの7分の1だそうです。視点を変えれば、わが国のガン患者はそれだけ激しい痛みに耐えているのです。今後、手術と同等以上の治癒率をもたらす放射線治療が、大きく期待される日もそう遠くないと思います。

6 むすび

今年は、最難関と云われている第一種放射線取扱主任者試験に、当院の放射線技師3名が挑戦する予定です。

これからも、患者さまに、この病院に来て良かったと言われるように、さわやかな笑顔を届けられる放射線科スタッフへと、成長していきたいと思っています。